

No.	16-4-3	場所	豊丘村河野	次世代への継承キーワード
名称	災害発生1週間目の二丁集落			情報伝達網整備 / 災害現象理解
災害現象	洪水氾濫			河川 寺沢川
補足事項				支流

本来は梅雨の盛りのはずだが、田植えどころか水田の代かきもできないほど、春先からの少雨で水枯れの状態が続いた1961年（昭和36年）6月。ところが、23日夜から降り出した雨は「お湿り」どころか徐々に勢いを増し、下伊那郡豊丘村でも雨水を吸い込んだ山肌の土砂が部分的に大きな被害をもたらした。

中でも、県道伊那生田飯田線から4キロほど東側の山あいにあった河野地区の二丁集落では、27日午後の山崩れをきっかけに電灯が消え、村からの情報も途絶えた。土砂交じりで濁流と化した間沢川は、一晩の間に農地を根こそぎ飲み込み、川べりの幹線道路を全てえぐり取ってしまった。

●体験談：松村寛・災害当時、豊丘村河野字二丁に在住。  
南箕輪村村長（H.4～9年）

<6月23日夜から降り出した>雨は二十六日も雨勢を強めて止まず、二十七日は朝から豪雨となって川の増水が始まり、**午後には山崩れによる道路の決壊や家屋の倒壊の情報が相次ぐ中で、電灯が消え、有線放送の支柱も山崩れで不通となり、村からの情報も途絶えた。**（中略）夜に入って雨は土砂降りとなり、たたきつける雨音の中で山津波の轟音と岩をかむ濁流の音は地鳴りとなって家屋をゆさぶり、電灯の消えた真暗の中で正に地獄を思わせた夜が白んで目にしたのは、すべての水田を呑み込んだ濁流が眼下に荒れ狂い、山肌は赤く露出し、川べりにあった幹線道路はすべてえぐりとられて跡かたもなく、余りの無残な光景に誰もが立ちすくんでしまった。（中略）二十八日午前中に**雨はやや小降りになったが、多量の水を吸い込んだ山肌は山津波となって相次ぎ、**（中略）多量の雨水を含んだ土砂はどこを歩いても膝迄没した。  
（松村 寛「濁流と遙かなる嶺へのみち」p.13、14）

記 録



災害発生一週間後の二丁集落

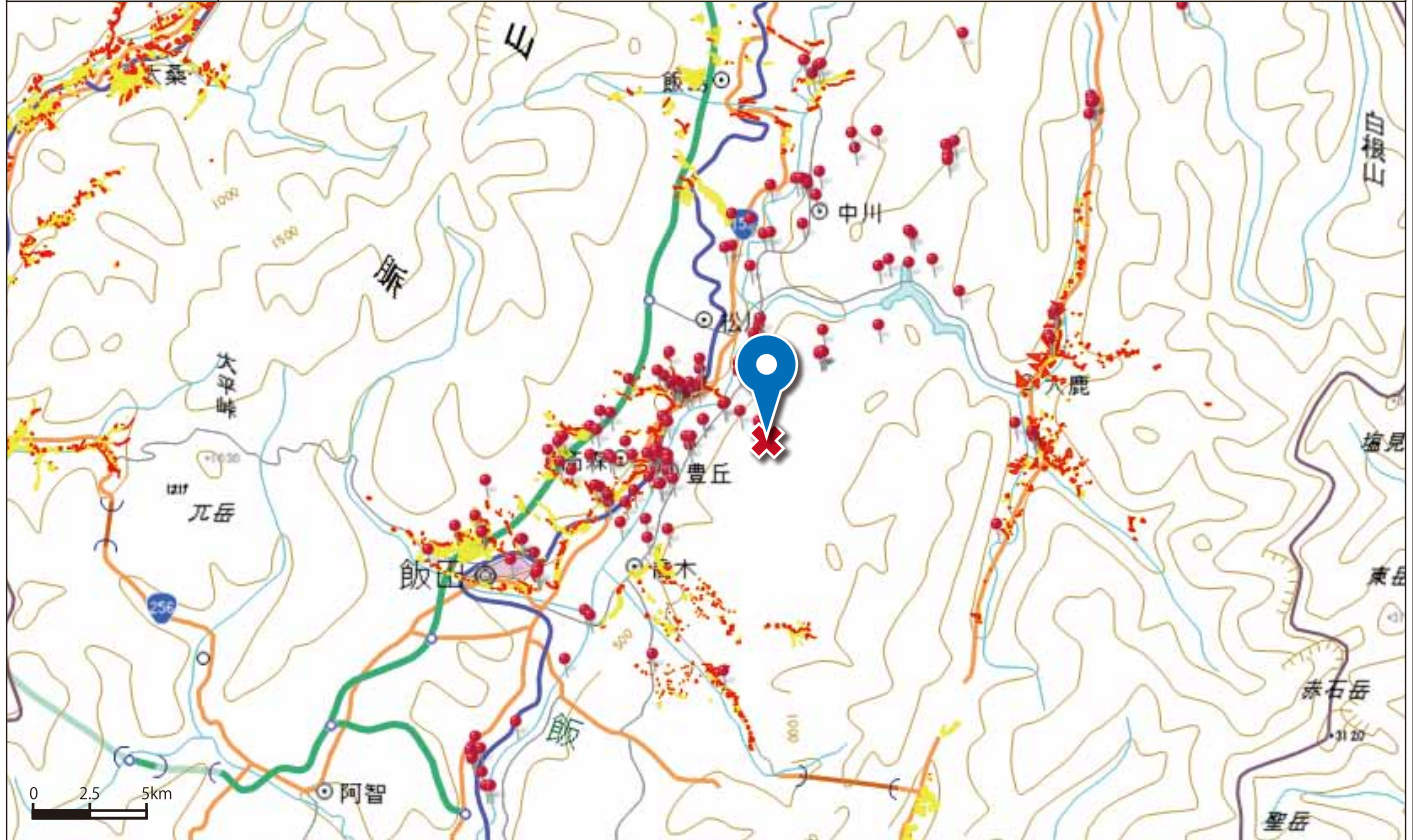
出典	松村 寛「濁流と遙かなる嶺へのみち」p.13、14		
備考	概要欄の< >は編者が補足説明したものです。		



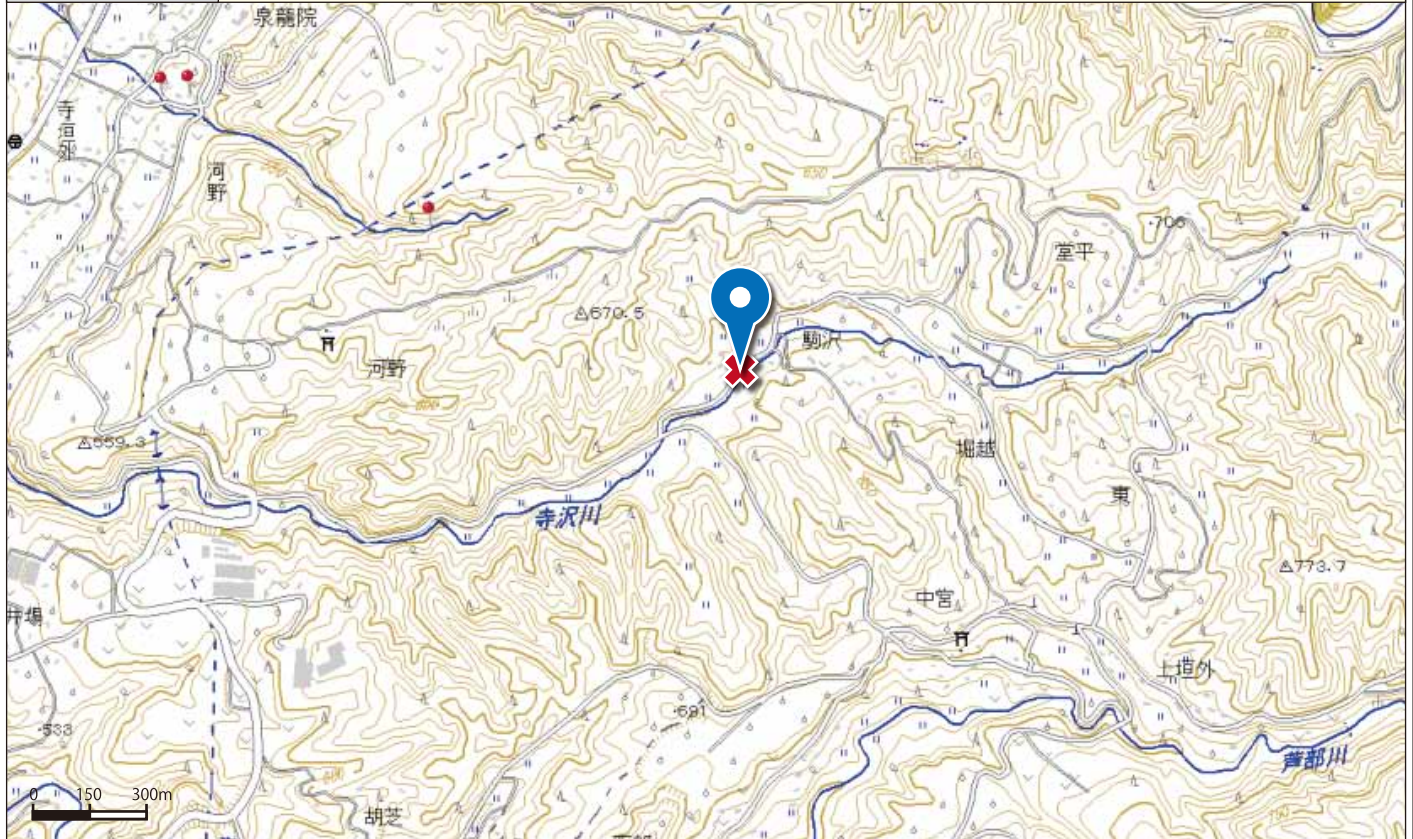
No.	16-4-3	場所	豊丘村河野	緯度	35.561513
-----	--------	----	-------	----	-----------

名称	災害発生1週間目の二丁集落	経度	137.928779
----	---------------	----	------------

地図 広域図



地図 詳細図



備考 上記地図に表示されている、黄色の区域は「土砂災害警戒区域」（通称：イエローゾーン）といい、土砂災害のおそれがある区域を指します。また、赤色の区域は、「土砂災害特別警戒区域」（通称：レッドゾーン）といい、土砂災害警戒区域のうち、建築物に損壊が生じ、住民に著しい危害が生じるおそれがある区域を指します。